

## 要旨

本論文は「現代におけるかくれキリシタン」を研究対象として論を進めてきた。第1部序章「かくれキリシタン信仰の研究史」では、かくれキリシタンに関する先行研究を研究領域ごとにまとめた。これまでかくれキリシタン信仰については様々な角度から調査・研究が成されてきた。その成果と課題を指摘した。またここでは、本論文の研究方法がフィールドワークを中心に行っていることの意味なども述べた。

第1部1章「かくれキリシタン信仰史概説」では、かくれキリシタンの歴史を3つの画期に区分し、それぞれの信仰形態の特徴をまとめた。第1節ではキリスト教伝来から弾圧期を経て、信徒発見までの概説を述べた。第2節では「表記の問題」・「信仰か習慣なのかという問題」など、かくれキリシタン信仰が現代社会において抱えている諸問題についての指摘と、本論文上でのそれらの取り扱いについて述べた。第3節では日本における西洋音楽教育について述べた。

第1部第2章「生月島概説」では、生月島とその信仰についてまとめた。第1節では、生月島の生活について、聞き取り調査と文献調査の両面から概観し、第2節では、生月島の様々な信仰を、「仏教」「神道」「その他」に分類し、考察した。多層信仰の中で生活し、信仰を続ける彼らの姿については、次章以降で仔細に描くため、第1項では仏教徒としての信仰、第2項では神道の氏子としての信仰、第3項ではその他の生活の中の信仰を扱い、その上で、第3節では生月島のかくれキリシタン信仰史を素描した。

第2部1章「生月島壱部地区のかくれキリシタン信仰」では、生月島の壱部地区を対象を絞り、そのかくれキリシタン信仰の考察を行った。第1節では、壱部地区の信仰組織の構成を確認し、第2節では、信仰の現状について、筆者による聞き取り調査を基にまとめた。第3節では、聞き取り調査の結果を基に信仰行事について考察し、第4節では、「おらしょ」と「唄おらしょ」の詳細な分析を行った。ここでは様々な状態で唄われた、唄おらしょの採譜とその分析から、このかくれキリシタン信仰が集団で信仰儀礼を行うことの意味について考察した。また、壱部地域だけにとどまらない、後継者不足の現状や、そのことに起因する婦人の信仰への参加の現状についても考察した。

第2部2章「生月島山田地区のかくれキリシタン信仰」では、生月島の山田地区を対象を絞り、そのかくれキリシタン信仰の考察を行った。第1節では、山田地区の信仰の現状をまとめ、第2節では、聞き取り調査の結果を基に信仰行事についての考察をした。第3節では山田地区の「御前様」について詳しく考察した。ここでは2014年12月～2015年1月にか

けてパリ国立高等研究所において行った、山田地区の御前様と聖ヨハネの絵画に関する研究の事例も挙げながら、考察を進めた。第4節では山田地区の「おらしょ」と「唄おらしょ」の詳細な分析を行った。ここでは、生月島の山田地区の唄おらしょである「さんじゅわん様のお唄」が、その地区の唄おらしょや他地区の唄おらしょと歌詞の点や旋律の面で異なりを見せていることを示し、この曲が他とは違う成立をした、という仮説を提示した。また、本章では、「さんじゅわん様のお唄」も民謡音階で構成されているという点に注目し、「さんじゅわん様のお唄」との類似性についても考察した。

第2部3章「生月島堺目地区のかくれキリシタン信仰」では、生月島の堺目地区を対象を絞り、そのかくれキリシタン信仰の考察を行った。第1節では、堺目地区の信仰の現状をまとめた。第2節では、聞き取り調査の結果を基に信仰行事について考察した。第3節では、信者らの信仰観について考察を行った。また本章では、生月島の住吉神社でおこなわれている「おくんち」行事の研究も行った。ここまで行ったおらしょの分析では、特に音楽的な要素から文化の変容についての考察を進めていたが、ここでは「おくんち」の中で神職と巫女によって舞われる芸能とその音楽にも注目した。平戸島と生月島の文化的な繋がりについては、島同士が近いことなどの地理的關係で物産の交易があったことが知られているが、本章での考察から、文化的な面の繋がりもまた、大きくおこなわれていた、ということも明らかとなった。生月島と同じように平戸島も潜伏キリシタン信者が多い島であった。それは、平戸島が出島の先駆けとなる、ポルトガルとの貿易港であったことや、この地を治めていた松浦家がキリシタン大名であったことに起因する。しかし禁教令の中では、例外なくこの地もキリスト教が禁止され、殉教者も出ている。そのような中、当時の潜伏キリシタンたちはキリスト教の教義として、文化をお互いに伝えることはなかったであろう。しかし、このように、文化の流入が起きていることから、冒頭でも述べたようにカトリックを基にしつつ、その変化の過程で様々な風土と混合し、現在の姿へと形成しているかくれキリシタン信仰において、平戸と生月では同一の変化過程が起きたことも考えられる。現在では平戸においてかくれキリシタン信仰は見られなくなってしまいましたが、本章での分析は、その痕跡を辿る時の1つの足掛かりになることを述べた。

第3部1章「生月島以外のかくれキリシタン信仰」では、生月島以外のかくれキリシタン信仰に目を転じた。第1節では、長崎県の外海地域のかくれキリシタン信仰を扱った。第1項では、外海地域のかくれキリシタン信仰の歴史をまとめた。第2項では、現在の信仰のありかたを現地調査の結果を基に考察した。第2節では、長崎県の五島列島のかくれキリシタン信仰を扱った。第1項では、五島列島のかくれキリシタン信仰の歴史をまとめ、第2項では、五島列島の若松島の事例に分析を加えた。

第3部2章「地域ごとの信仰組織の比較分析」では、ここまで見てきた全ての信仰組織を比較した。第1節では信仰行事の方式の組織ごとの相違点を指摘した。第2節では信仰内で使用される聖具について、それぞれの事例の比較から分析した。特に、長崎県生月島山田地区のかくれキリシタン組織で使用されていたかくれキリシタン信仰に関わる民具の事例研究

を行なった。かくれキリシタン信仰の中では、聖具そのものも「貴いもの」として考えられている。そのため信仰に関する聖具の調査においては、現在も信仰活動がおこなわれている地区ではなく、現在では信仰組織自体は解体してしまった山田地区においても調査を行なった。ここでは実際に彼らはどのような聖具を用い、信仰活動をおこなっているのかについて考察した。第3節では各信仰組織の「唄おらしょ」に注目し、その比較分析を行った。第4節では、「御前様」に供える「御膳」の比較研究を行った。

第3部3章ではかくれキリシタン信仰にとって新たな局面となる「世界遺産登録推進運動」の功罪について論じた。かくれキリシタン信仰は現在、世界遺産登録活動の最中において、イコモスからの申請取り下げ勧告を受け、苦戦している状態である。その理由は、「弾圧期の歴史的背景の調査が足りない」というものであった。これまでのかくれキリシタン信仰についての研究は、資料の少なさに甘んじ、指摘通り、潜伏化の信仰活動についてはほとんど言及されてはこなかった。論文内で述べた通り、江戸期のキリシタンたちは発覚を恐れたため、可視化できるモノには信仰を現さなかった。それゆえ、キリシタン関係の資料は乏しいのだが、本章では、イタリアの国立マルチャナ図書館において江戸期に日本に潜伏し、本国ローマに送られた書簡の研究を行い、弾圧当時の様子の解明に取り組んだ。

## 21 世紀のかくれキリシタン信仰研究に向けて

このように地域ごとに、現代におけるかくれキリシタン信仰がどのような状況の元、どのように行われているのかを様々な角度から考察した結果、かくれキリシタン信仰には、伝来当初の要素だけではなく、時代ごとの様々な要素が複合的に存在しており、それらが同一平面上で今でも伝承され続けているということが分かった。

では次に、なぜ「現代の」かくれキリシタン信仰、「21 世紀の」かくれキリシタン信仰を研究したのかを述べたい。本論文では、現代におけるかくれキリシタン信仰が、「現在、どのような姿」を見せているのかということから、「なぜ、現在の姿」を見せているのか、ということに着目して述べた。かくれキリシタン信仰は信者の減少、組織の解体という危機的な状況にある。その信仰の中で生きる人々は信仰をどのようにとらえ、どのように生活との折り合いをつけ伝承を続けているのだろうか。消滅の危機にあるかくれキリシタンの調査が出来る期間は、長く残されているとは言えない。それゆえに筆者は、信者・元信者の証言や回想を辿り、消えゆくかくれキリシタン信仰を記録・記述し、そこから見えた信仰形態の変化や信仰観について研究した。

本論文の題は、それゆえに「現代かくれキリシタン考」と題し、副題を「一長崎県生月島の信仰民俗誌を中心に一」とした。「現代かくれキリシタン信仰」とすると、「現代社会がどのようにかくれキリシタン信仰を受容、あるいは認識しているのか」といった意味に捉えられることも考えられるだけではなく、そのようなテクニカルタームが存在するかのようニュアンスになってしまう。しかし、先ほども述べたように、ここでいう「現代」とは、現代における信者の意味であって、現代社会全体にとってのかくれキリシタン信仰という意味で

はない。

今までのかくれキリシタン信仰研究は、もっぱら現代に残るかくれキリシタン信仰とその関連史料から、過去のキリシタンの実像を探求することに意欲的であった。もちろん、片方でそのような作業も重要であり、筆者もその方向でいくつかの研究成果を残してきたが、筆者が長年現地調査をする中で見えてきたのは、その信仰を受け継ぎ、生活の中で実践している信者たちの心性である。かくれキリシタン信仰はその名称からしばしば誤解を受けるが、決して「隠れて」いるわけではないことは、論文内で繰り返し述べた。潜伏キリシタン期には幕府の目を逃れるために「隠れて」信仰活動をおこなっていたのは事実であるが、現代では「隠れて」いるわけではなく、「人に信仰を見せずにおこなう」という形式のみが伝承されている。世界遺産登録活動においては、この歴史的背景と、現在の様子を正しく発信してゆく必要があると考える。

一方で、現在では昭和期までのようには信仰の秘匿性が高くはないものの、やはりかくれキリシタン信者は信仰について自らからはあまり語ろうとはしない。そのような、現代社会に生きる信者がどのように信仰を捉えているのか、という問題を、パーソナル・ナラティブに依拠して分析した研究は多くはない。それゆえ本論文は、かくれキリシタン信仰を仔細に分析するとともに、その現代的意味について問うものであったといえる。

そもそも筆者の研究は、かくれキリシタン信仰の中で唄われている「唄おらしょ」についての研究を始めたことに端を発する。しかし、聞き取り調査を進める中で、伝承の断絶や後継者の不在が色濃く、この信仰に影響をかけていることを知ることとなった。そして、「500年も続けられた信仰がなぜ現代社会の中でこのような問題に直面しているのか。」という疑問がわいてきた。その答えを見つけるためには、人々の声を聴くことに重きを置く研究方法、つまりフィールドワークを中心とする必要がある。フィールドワークを重ねる中で、どの地域も、どの組織も、ある一定の期間で信仰に関する状態の危機や断絶が起きていることに気づかされた。それが戦中・戦後の混乱期と、高度経済成長期である。繰り返し述べたように、かくれキリシタン信仰は口伝での伝承を基本として行ってきた。しかし、戦中においては覚えるべき期間である青年期に、地元と離れ戦地で長く暮らす者が多く、そのため信仰の伝承の機会がなく、従来通りの伝承を行うことができなかった。また、戦後も混乱の中、信仰とは離れた生活を送っている者がほとんどで、ここでも伝承の機会が失われてしまった。そして、高度経済成長期に入り、ほとんどの働き手が地元密着型の生活基盤を持たなくなった。例えば生月島ではそれまでは近海での漁で生計を立てていたものが、遠洋漁業へと変化し、島不在の期間が多くなったという事例が挙げられよう。そのような事情により、もはや従来通りの信仰の伝承は不可能になってしまった。

これまで見てきたように、かくれキリシタン信仰は、変化を繰り返し、時代や人々の生活様式に即する形で伝承し続けられている。そして21世紀の現在、キリシタン信仰にとって最も大きな事象は世界遺産登録推進活動であろう。国内外の資料にあたり、ジャンル横断的な方面からの研究が、今後の研究者に求められている。